

歌川芳幾画 今様擬源氏

日本語日本文学科蔵
文久3年～慶応2年(1863～66)
大判錦絵 54図(最終図のみ欠・目録1図)
(画帖・各図)縦36.8cm 横24.0cm

光源氏の恋模様を描きだした、世界最古の長編小説とされる『源氏物語』。上流階級に享受されてきた優雅な物語は、江戸時代には印刷技術の発展や寺子屋の普及による識字率の向上を背景に、絵入りの梗概書などが浸透し、庶民にも身近な存在となった。浮世絵版画でも五十四の巻に取材した揃物のほか、「夕顔」「若菜」など人気の高い場面のみを描く例も確認でき、ある時は原拠の時代設定をそのままに、ある時は江戸時代風に置き換える「やつし」や「見立」の手法を用いて、多様な作品が生み出された。

歌川芳幾(1833～1904)が幕末に手がけた「今様擬源氏」は、『源氏物語』の各巻から連想される人物を描く揃物で、目録を加えた計五十五図が刊行された。図の上部は画帖を模した四つの枠組みを配する形式で統一され、右よりシリーズ名、巻名と作中に登場する著名な和歌、見立てられる人物に関する詞書が記載される。原則として右枠に葵の葉と巻名に該当する源氏香、中央部にその巻を象徴する事物を配し、風雅な雰囲気を出す工夫がなされている。一方で、肝心の人物が『源氏物語』とかけ離れたイメージを持つ場合が多いのも、この揃物の面白いところだ。例えば光源氏が都を離れ蟄居する「須磨」の図では、源氏の武将の熊谷次郎直実と討ち取った平家の公達、敦盛の首と鎧が描かれる(挿図1)。須磨という地名から一ノ谷の合戦における「敦盛の最期」の逸話を導き出すという、武者絵を得意とした芳幾らしい一図である。実はシリーズ名の「今様」は当世風、「擬」は別の物に見立てるという意味がある。原拠の『源氏物語』を江戸時代風にアレンジするのがこの揃物の眼目であり、熊谷のような実在の武将のほか、流行の歌舞伎や小説など当時の庶民にお馴染みの逸話を結び付け、その落差を楽しんだのである。

今回の展示にちなみ「恋」の逸話を描く例を挙げてみよう。桜の宴の後で光源氏が朧月夜の君と出会う「花の宴」の場合、薄雪姫が清水寺の花見で園部左衛門を見初める初々しい姿に見立てられている(歌舞伎「新薄雪物語」、挿図2)。また「鶯の初音知らせよ」の歌から巻名がつけられた「初音」に関しては、鶯を助けた縁で長者の娘梅が枝が佐々木源之助に惹かれるという、歌舞伎「鶯墳長柄故」の一場面を巧みに導き出しており、二人が視線を交わす様も微笑ましい(挿図3)。現代の我々には読み解きが難しい図もあるが、時空を超えた結びつきを楽しむ豊かな江戸時代の感覚を、じっくりと味わうことができるシリーズである。

(日本語日本文学科非常勤講師 藤澤 茜)



挿図1 須磨(熊谷次郎直実)



挿図2 花の宴(奴妻平・園部の左衛門・うすゆき姫)



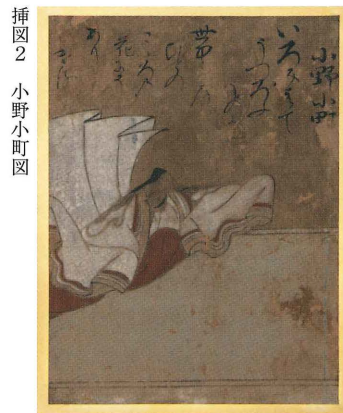
挿図3 はつ音(梅ヶ枝姫・佐々木源之助高政)

三十六歌仙額

勸修寺蔵 学習院大学史料館保管
江戸時代
全6面(各)
縦44.4cm 横164.0cm



右から業平、遍照、素性法師、紀友則、猿丸、小野小町



挿図2 小野小町図



挿図1 業平図

三十六歌仙とは、平安時代の歌人・藤原公任(966～1041)が『万葉集』や『古今和歌集』などの歌集から選んだ、三十六人の優れた歌人たちのことである。平安時代後期から鎌倉時代にかけて流行し、歌仙伝や、装飾を凝らした美しい料紙に三十六人の和歌を書写した「三十六人家集」(京都・本願寺蔵)などが作られた。歌とともにその歌仙の姿を描く「三十六歌仙絵」の出現は鎌倉時代になってからで、旧秋田藩主の佐竹家に伝来した「佐竹本三十六歌仙絵」(出光美術館ほか)はその代表作である。

巻物仕立ての作例が多い歌仙絵であるが、室町時代になると、扁額という形となって登場する。人々の心に響く和歌が神仏の心を慰めるという思想の結びつきにより、扁額に歌仙の絵を描いて寺社に奉納することが室町頃盛んに行われたようである。京都・勸修寺が所蔵する「三十六歌仙額」(以下、勸修寺本)も、その一つであろう。六面の額に公任撰の三十六歌仙を描いた色紙がそれぞれ六枚ずつ貼り付けられたものである。勸修寺本が収められていた外箱の箱書には「勸修寺八幡宮寶物歌仙」とあることから、元は勸修寺の鎮守社であった八幡宮の宝物であったことが分かる。長年額として懸けられていたため、全体的に痛みが激し

いものの、各歌仙の顔部分や彩色はかろうじて残っている。全体を通して丸みを帯びた面長の顔立ちで、顎が長く、額の部分が丸く突き出しているのが特徴で、歌仙一人一人の顔がしっかりと描き分けられている(挿図1)。一方で、素性法師や坂上是則など、一部の歌仙に関しては、丸顔で顎が短く、他の歌仙たちとは異なる特徴を持っており、また別の絵師の手を思わせよう。歌仙が身に着けている袴や袍部分は、やや誇張されたようなふくらみを持っており、女流歌人に関しては褌がまるで扇のように広がっているが(挿図2)、これは白描の歌仙絵などにも見られる特徴である。

なお、かすかであるが、何人かの歌仙の装束に「コン」「アサ」「エン」といった文字が記されている。これは著色の指示を表したもので、「コン」は紺色、「アサ」は浅葱色、「エン」は藤脂色を指していると考えられる。このような色の指示は、例えば原本と共に複数の模本が存在している「太平記絵巻」にも見られるもので、分業で制作していたことを思わせる。三十六枚という枚数から、勸修寺本の制作にも複数の画工が関わっていた可能性があるだろう。

(助教 柳澤恵理子)